

## 動結式 “ 把 ” 構文の成立条件について

|       |                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: eng<br>出版者:<br>公開日: 2017-10-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者:<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2297/42645">http://hdl.handle.net/2297/42645</a>             |

## 動結式“把”構文の成立条件について

楊麗榮 新潟大学大学院現代社会文化研究科

rei37@hotmail.com

### 1. はじめに

中国語には、特定の目的語を動詞の前に置いて、介詞“把”を加え、主動文を“把”構文にするケースがよく見られる。しかしながら、主動文を“把”構文に変形できるものもあれば、変形できないものもある。次の例を考察しよう。

- (1) a. 我们打败了敌人。(私たちは戦い、敵を敗った。)  
b. 我们把敌人打败了。(私たちは戦い、敵を敗った。)
- (2) a. 昨天在街上我碰到了小李。(昨日街で李さんに会った。)  
b. \*昨天在街上我把小李碰到了。
- (3) a. 我把这歌唱腻了。(私はこの歌を歌って飽きてしまった。)  
b. 这歌把我唱腻了。
- (4) a. 他把钱赌输了。(彼は賭け事して負けた。<sup>1)</sup>  
b. \*钱把他赌输了。 (王红旗 2001:9)

(1a)と(2a)は同じ形式を伴う動結式の主動文であるにもかかわらず、(1a)は(1b)のように“把”構文に書き換えることができる一方で、(2a)は(2b)のように書き換えると不適格文になる<sup>2</sup>。また、(3a)と(4a)は同じ“把”をマーカーにする動結式“把”構文であるが、(3a)は(3b)のように、対象“这歌”を文頭に移動させ、主語としての役割を担わせることができる。一方、(4a)を(4b)のように、対象“钱”を文頭に移動すると不適格文になる。これはなぜなのであろうか。本稿の目的は、項構造と語義指向の分析方法を用いて、“把”構文の成立条件を明らかにすることである。なお、出典を付していない例文はすべて筆者による作例である。

### 2. 先行研究における問題点

“把”構文は中国語学において長年に渡って論議されてきた課題の一

つである。最初に“把”構文の概念を「処置」構文として提唱したのは王力(1943)である<sup>3</sup>。その後、“把”構文を「処置」構文と「使役」を表す「使役」構文とに分けて分析する研究が多く見られる(王红旗 2001 ; 范晓 2001 ; 施春宏 2010; 袁毓林 2013)。

“把”構文の述語の部分は結果を表す動補構造がよく見られることは袁毓林(2013 : 107)に指摘されている。したがって、本稿は動結式“把”構文を考察対象とし、従来の代表的な先行研究を概観しながらその問題点を検証する。

### 王红旗(2001)

王红旗(2001)は、目的語が動作主であるかどうかによって、“把”構文を「甲」と「乙」の2種類に分類し、甲類をさらに2種類に下位分類している。

王红旗(2001)によれば、甲類は目的語が動作主ではない“把”構文を指す。

- (5) 他俩把扁担抬折了。 (王红旗 2001:6)

(彼らの担いだ天秤棒が折れてしまった。)

- (6) 孩子把房顶跳塌了。 (ibid.)

(子供が飛び跳ねたため、屋根が突き抜けた。)

王红旗(2001)は(5)-(6)の例には2つの意味が含まれていると説明する。具体的には、(5)-(6)は“他俩抬扁担+扁担折了”、“孩子跳+房顶塌了”の2つの部分から成り立っている。また、(5)は動作主の“他俩”が“担”という動作を行うことで、客体の“扁担”を“折了”という状態に変化させたことを表す<sup>4</sup>。(6)は動作主の“孩子”が“跳”することによって、客体の“房顶”を“塌了”という状態に至らせたことを表す。また、客体の“扁担”と“房顶”は動作主ではなく、対象であることは明らかである。

- (7) 这些牛肉把刀都切钝了。 (王红旗 2001:7)

(ナイフでこの牛肉を切ったため、切れ味が悪くなった。)

= (某人) 切牛肉+刀钝了

(7)のパターンも甲類に属するが、“把”の客体の“刀”は本当の「目的語」ではなく、動作と関連のある道具であり、動作“切”が客体の“牛肉”に力を加えた時に、“刀”が何らかの影響を受けたと考えられる。

また、王红旗(2001)によれば、乙類は目的語が動作主である“把”構文を指す。

(8) 这歌把人听烦了。(この歌は聞き飽きてしまった。)(王红旗 2001:8)

王红旗(2001:7)は乙類の特徴を2つにまとめ、その一つは発話者が旧情報の元で、聞き手に情報伝達をしていること、もう一つは乙類は大抵口語の中でしか使われないことであると述べている。(8)の“这歌”は旧情報であることを表す。

さらに、甲類と乙類の意味上の区別としては、甲類の“把”構文の補語は語義上動作の客体にかかっている。客体は対象である。乙類の補語も“把”の後ろにある処置対象を説明しているが、この処置対象は実際の動作主である(王红旗 2001:7)。

王红旗(2001)は“把”構文について非常にわかりやすく説明しているように思われる。しかしながら、王红旗(2001:9)にも述べられているように、“懂、明白、会、赔、赚、输、赢”のような動詞が補語の位置にあり、その語義上、動作主を指向する場合に、乙類の“把”構文には書き換えられない理由がどこにあるのかは解明されていない。

(9) a. 他把钱赌输了。(彼は賭け事をして負けた。) (= (4))

b. \*钱把他赌输了。

(10) a. 他们把官司打赢了。(彼らは訴訟を勝ち抜いた。)

b. \*官司把他们打赢了。

### 袁毓林(2013)

袁毓林(2013)は動結式を一項、二項、三項動結式に分類し、その形成

メカニズムを説明している。袁毓林(2013)は特に“打赢、打胜、打败、打输”を伴う動結式“把”構文について詳しく分析を試みている。しかしながら、“学好、学坏、学乖、学傻”などのような「二項動詞＋一項動詞」で形成された一項動結式に関しては、袁毓林(2013: 110)は次のような説明にとどまっている。

- (11) a. 小明学好了。(明さんは更正した。) (袁毓林 2013: 110)  
 b. \*小明把学好了  
 (12) a. 小刚学坏了。(明さんは不良になった。) (ibid)  
 b. \*小刚把学坏了。

(11)–(12)の“学好”と“学坏”はどちらも「二項動詞＋一項動詞」の一項動結式である。この場合は処置対象が存在しないため、“把”構文を用いることはできない。

しがしながら、袁毓林(2013)が挙げた“学好、学坏、学乖、学傻”の単語の中には次の(13)–(14)の反例が見られる。

- (13) a. 小明学函数学傻了。  
 (明さんは関数を勉強しすぎて、おかしくなってしまった。)  
 b. 学函数把小明学傻了。  
 (関数を勉強しすぎて、明ちゃんはぼけた。)  
 (14) a. 小明搬家搬累了。(明さんは引っ越しで疲れた。)  
 b. 搬家把小明搬累了。(引っ越しで明さんは疲れた。)

(13)–(14)の前項述語“学”と“搬”はどちらも二項動詞であり、後項述語“傻”と“累”是一项動詞であるにもかかわらず、“把”構文が成り立っている。それはなぜであろうか。第三章では項構造と語義分析の手法を説明した上で、第四章で動結式“把”構文の成立条件を提案する。

### 3. 項構造と語義分析

#### 3.1 項構造について

「項構造(argument structure)」とは、「ある述語が、その語彙特性とし

てどのような項をいくつ必要とし、また、それぞれの項はどのような  $\theta$  役割を担うのかという情報である」(中村捷・金子義明・菊池朗 1989 : 216)。「 $\theta$  役割」とはすなわち「意味役割」であり、動作主 (Agent : 動作を行う人)、対象 (Theme : 移動や状態の変化を受けるもの)、着点 (Goal : 移動・変化などの到着点)、起点 (Source : 出発点)、経験者 (Experiencer : 感情・感覚の点で影響を受けるもの) などを指す<sup>5</sup>。影山太郎(1996 : 21)は「統語構造と意味構造の間をとりもつのが、項構造(argument structure)というレベルである」と指摘した。本稿は影山太郎(1996 : 21)の主張を賛同し、“把”構文の成立条件を項構造の角度から検証する。また、現在のところ、動詞がとる「必須項(obligatory argument)」の数は主に一項動詞、二項動詞、三項動詞に分類されているため、具体的に動詞と必須項の関係を見よう。

(15) 她走了。(彼女は去っていた。) <一項動詞>

動詞“走”は外項として動作主の  $\theta$  役割を持つ NP を選択する。したがって、“走”は次のような項構造を持つ(下線は外項を示す)<sup>6</sup>。

走: [agent]

(16) 她吃饭了。(彼女にご飯を食べた。) <二項動詞>

動詞“吃”は外項として動作主の  $\theta$  役割を持つ NP を選択し、また内項として対象の  $\theta$  役割を持つ NP を選択する。したがって、“吃”は次のような項構造を持つ<sup>7</sup>。

吃: [agent, Theme]

(17) 她送了我一本书。(彼女は私に本を一冊くれた。) <三項動詞>

動詞“送”は起点を表す  $\theta$  役割を持つ NP を選択する。また内項として対象の  $\theta$  役割を持つ NP を選択する。ここではそれぞれ“她”と“书”を指す。また“书”の着点“我”を表す  $\theta$  役割を持つ NP が存在しなければならない。したがって、“吃”は次のような項構造を持つ。

送: [Source, Theme, Goal]

“把”構文は処置或いは使役の意味を表すため、少なくとも二つの項を必要とすることは明らかである。以下は動結式を一項、二項、三項動結式に分類し、項構造の角度からその成立条件を検証する。また、以下は動結式を VR と略す。

### 3.2 語義指向分析について

語義指向とは文にある成分がどの成分とかかわっているのか、その関係を示すものである(陸俊明 2005)。中国語学では語義指向の考察対象は“定语(連体修飾語)”、“状語(連用修飾語)”、“補語(補語)”のような説明性のある成分である(周国光 2006)。本稿では“補語(補語)”の語義指向を中心に分析する。また、周国光(2006)は補語が語義上どの成分とかかわっているか、それを確認する手段としては“成分分解—組配法(成分分解—組配法)”があると指摘する。

(18) 我们踢赢了球。(私たちはサッカーをして勝った。) (周国光 2006)  
(我们踢球+我们赢了)

(19) 我们踢破了球。 (ibid)  
(私たちはサッカーをして、サッカーボールが壊れた。)  
(我们踢球+球破了)

(20) 我们踢完了球。(私たちはサッカーをし終わった。) (ibid)  
(我们踢球+踢完了)

以下は“成分分解—組配法(成分分解—組配法)”を用いて、語義指向の違いによる文の構造の違いを見てみよう。

(21) 看完了。(読み終わった。)

(22) 看累了。(読んで疲れた。)

(21)–(22)はそれぞれ単音節の動詞“看”+補語の“完”と“累”+助詞“了”から構成されている。(21) – (22)は一見同じ構造の文に見えるが、

実際には補語が語義上かかっている成分が異なる。(21)-(22)を(23)-(24)に変えてみると、その関係がはっきりと見えてくる。

(23) 我把书看完了。(本を読み終わった。)

(我看书+看完了)

(24) \*我把书看累了。

(我看书+我累了)

(23)は“我看书”と“看完了”の二つの文に分解することができる。したがって、補語“完”は動作の“看”を指向していることがわかる。また(24)は“我看书”と“我累了”の二つの文に分解することができるため、補語の“累”は動作主の“我”を指向していることがわかる。つまり、(23)-(24)からわかるように、語義指向の違いにより“被”構文に変形できるものとできないものがある。(25)-(28)は(21)-(22)を基にして変形した他の構文の例である。

(25) a. 书被我看完了。(私は本を読み終わった。) <“被”構文>

b. \*书被我看累了。

(26) a. \*我看书看完了。

b. 我看书看累了。(私は本を読んで疲れた。) <動詞コピー構文>

(27) a. 书看完了。(本を読み終わった。)

<受動者を主語にする主動文>

b. \*书看累了。

(28) a. 我看完了。(私は(本を)読み終わった。)

<動作主を主語にする主動文>

b. 我看累了。(私は(本を)読んで疲れた。)

(25)-(28)でわかるように、補語は動作にかかっている場合は、“被”構文、受動者を主語にする主動文、動作主を主語にする主動文に変形することができるが、動詞コピー構文に変形することはできない。一方、補語は動作主にかかっている場合は、動詞コピー構文、動作主を主語にする主動文に変形することができるが、“被”構文、受動者を主語にする

主動文に変形することはできない。

このように、語義指向の分析方法を用いることで、一つの文の成分について文法上と語義上の関連性をよりわかりやすく、かつ合理的に文の構造と語義構造の関係を説明できる。したがって、本稿は語義指向の分析方法を用いて説明する。

#### 4. 動結式“把”構文の成立条件

動結式の前項述語は主に他動詞で担うが、自動詞で担うことも見られる。後項述語は自動詞または形容詞で構成されている(石村広 2011)。また、動結式を構成する組み合わせは単純配列で見ると、次のようになる。

表1 動結式の組み合わせパターン

|           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|
| 一項動詞＋一項動詞 | 一項動詞＋二項動詞 | 一項動詞＋三項動詞 |
| 二項動詞＋一項動詞 | 二項動詞＋二項動詞 | 二項動詞＋三項動詞 |
| 三項動詞＋一項動詞 | 三項動詞＋二項動詞 | 三項動詞＋三項動詞 |

以下は現代中国語によく見られる一項動詞、二項動詞、三項動詞の例を見よう<sup>8</sup>。一項動詞としては、例えば“走”、“哭”；二項動詞は、“吃”、“学”；三項動詞は、“给”、“送”などが挙げられる。また形容詞は2種類に分けられる。一項形容詞としては、“急”、“累”；二項形容詞は、“熟”、“狠”等が挙げられる。次に一項動詞、二項動詞、三項動詞で組み合わせた一項、二項、三項の動結式“把”構文について、動結式の前項述語と項の関わり、後項述語(補語)の語義指向の角度からその成立条件を検証してみる。

##### 一項動結式

一項動結式を形成できるものとして次のような組み合わせが見られる。なお表2「組み合わせた動結式の例」に記載した単語は袁毓林(2013)から引用したものである。以下、前項述語 Verb を V、後項述語 Resultative を R と略す。

表2 一項目動結式のパターン

|           | 組み合わせた動結式の例           |
|-----------|-----------------------|
| 一項目V+一項目R | 冻病、晕倒、坐乏、热死、冻醒、坐累など   |
| 二項目V+一項目R | ① 走晚、来迟など             |
|           | ② 学好、学坏、学乖、学精、学傻、搬累など |
| 三項目V+一項目R | 教晚                    |

### 一項目V+一項目R

「一項目V+一項目R」で組み合わせた動結式は以下の三つに下位分類できる。

#### ① 動作主はVからθ役割が付与され、Rは対象を説明する場合

(29) a. 他哭乱了我的心。

(彼は泣いて、私の心を乱した。) (刘培玉, 许海命 2010)

(他哭+我的心乱)

b. 他把我的心哭乱了。

(29a)のV“哭”と後項述語“乱”は自動詞であるにもかかわらず、対象の“我的心”を“乱”という結果に至らしめたことを表す。言い換えれば、Vは自動詞の場合でも、動作主はVからθ役割が付与され、後項述語が対象にかかっている場合は、(29b)のように“把”構文を構成できることを示唆する。

#### ② 動作主はVからθ役割が付与されず、Rは動作主にかかっている場合

(30) a. 他冻病了，就麻烦了。(彼が凍えて病気になったら大変だよ)

((因为冻)+他病了)

b. 把他冻病了，就麻烦了。

((私たちのせいで) 彼が凍えて病気になったら大変だよ。)

- (31) a. 她干了一整天的农活累倒了。  
 (丸一日の農作業で、彼女は疲れて倒れてしまった。)  
 ((因为累)+她倒了)  
 b. 干了一整天的农活把她累倒了。  
 (丸一日の農作業で、彼女は疲れて倒れてしまった。)

(30)-(31)のそれぞれのR“病”、“倒”は動作主の“他”、“她”を説明している。また、(30b)の動作主(“咱们(私たち)” また他の誰かを含意している)と(31b)の“干了一整天的农活”はどちらもVRのVから $\theta$ 役割が付与されていないにもかかわらず、その処置者である状態に至らしめた動作主であるため、“把”構文を構成することができる。

(30)-(31)に挙げた一項動結式はなぜ“把”構文と共起することができるのか、それはこれらの一項動結式は自動詞用法だけではなく、他動詞用法、つまり能格動詞としての働きもあると考えられる。

③ RはVRのVにかかり、単純にVの状態を説明している。

- (32) a. 我今天去学校走晚了。(私は今日学校に行くのが遅くなった。)  
 b. \*我今天去学校把走晚了。  
 (33) a. 昨天下午开会，她却来迟了。  
 (昨日の午後会議があったのに、彼女は来るのが遅かった。)  
 b. \*昨天下午开会，她却把来迟了。

(32a)-(33a)の場合では、RはVについての説明であり、処置対象が存在しない。第二章でも説明したように、“把”構文は処置或いは使役の意味を表すため、少なくとも二つの項を必要とする。したがって、(30)-(31)のような構文は“把”構文に書き替えられない。

## 二項V+一項R

(34)-(35)は「主語+V+R+助動詞“了”」の主動文である。Vは二項動詞であり、Rは一項形容詞や動詞を用いる。動結式全体が一項動結式となり、処置対象が存在しない。この場合は“把”構文を用いることが

できないと袁毓林(2013)は指摘した。

(34) 小明学好了。(明さんは更正した。) (= (13))

(35) 小刚学坏了。(明さんは不良になった。)(= (14))

しかしながら、“学傻”や“搬累”などの「二項V＋一項R」の動結式を使った以下の反例が見られる。

(36) a. 小明学函数学傻了。 (= (15))

(明さんは関数を習いすぎてぼけてしまった。)

b. 学函数把小明学傻了。 (= (16))

(関数を習いすぎて明さんはぼけてしまった。)

(37) a. 小明搬家搬累了。(明さんは引っ越しで疲れた。)

b. 搬家把小明搬累了。(引っ越しで明さんは疲れた。)

(36)–(37)のVR“学傻”や“搬累”は(34)–(35)のVRと同様に一項動結式であるが、(34)–(35)の普通の主動文と異なって、動詞コピー構文を用いる構造である。つまり、動詞コピー構文の最初の動詞“学”や“搬”の後ろに目的語が付くことによって、“動賓フレーズ(動詞＋目的語)”が形成されている。この動賓フレーズは文頭に移動し、主語として機能し、元来の主語“小明”は“把”の後ろに移動し、“把”の処置対象として共起できるため、動結式“把”構文を構成することが容認できたのである。

### 三項V＋一項R

(38)は三項Vと一項Rで構成される一項動結式の例である。

(38) 昨天夜里我睡晚了。(昨の夜寝るのが遅かった。)(袁毓林 2013:110)

Rの“晚”はV“睡”を指し、処置対象が存在していないため、“把”構文は用いられない。

## 二項動結式

二項動結式は概ね動作主と対象の二つの項を持っているという特徴がある。つまり、二項動結式は他動性を持つ動結式である。したがって、ほとんどの二項動結式は“把”構文を構成することができる。

表3 二項動結式のパターン

|             | 組み合わせた動結式の例          |
|-------------|----------------------|
| 一項 V + 一項 R | 喊哑, 羞红, 睡脏, 累病, 急哭など |
| 一項 V + 二項 R | 走丢, 走怵など             |
| 二項 V + 一項 R | 吃早, 看到, 骂急, 开跑, 垒高など |
| 二項 V + 二項 R | 听懂, 学会, 听明白など        |

## 一項 V + 一項 R

以下は動作主と受動者が主語になるパターンを分け、「一項 V + 一項 R」の動結式の特徴を分析する。

① 動作主は主語になる。

(39) a. 他早已哭哑了嗓子。 (CCL)

(彼は泣いて、喉がとっくにかすれている。)

(他哭, 嗓子哑了)

b. 他早已把嗓子哭哑了。

(40) a. 那个姑娘羞红了脸。 (CCL)

(あの女の子は恥ずかしがって、顔が赤くなった。)

(那个姑娘(因为)害羞, 脸红了)

b. 那个姑娘把脸羞红了。

(39)の動作主“他”は V から  $\theta$  役割が付与され、R の“哑”は対象の“嗓子”にかかる。(40)の動作主“那个姑娘”は V から  $\theta$  役割が付与され、

R の“紅”は対象の“臉”にかかる。

② 経験者は目的語になる。

(41) a. 彻夜不眠的劳作累病了妈妈。

(徹夜の作業でお母さんは疲れて病気になった。)

(妈妈累, 妈妈病了)

b. 彻夜不眠的劳作把妈妈累病了。

(徹夜の作業でお母さんは疲れて病気になった。)

(42) a. 那事急哭了妈妈。 (袁毓林 2013:111)

(そのことでお母さんはいらいらして泣いた。)

(妈妈急, 妈妈哭了)

b. 那事把妈妈急哭了。 (ibid)

(そのことでお母さんはいらいらして泣いた。)

(41)–(42)の V “累”、“急”と R の“病”、“哭”は語義上どちらも経験者の“妈妈”を説明している。

(39)–(42)でわかるように、動作主は主語であり、V と R にかかっている成分が異なる場合、“把”構文を形成できることがわかる。また、経験者は目的語であり、V と R は同一指示の場合も“把”構文を形成することができる。

# 一項 V+二項 R

(43)–(44)の主語“老人”と“盘山路”は語義上 V と R に関与していないが、それぞれの結果“丢”と“怵”に至る理由になる。

(43) 老人把孙子给走丢了。 (张谊生 2005:131)

((老人が理由で)孫を見失った。)

(孙子走+孙子丢)

(44) 盘山路把她走怵了。 (ibid)

(彼女は曲がりくねった山道をたくさん歩いたので、怖くなった。)

(她走+她怵)

## 二項 V+一項 R

(45)と(46)の例の違いを考えよう。

(45) a. 她弄脏了房间，还不承认。

(彼女は部屋を汚くしたのに、認めない。)

(她弄+房间脏)

b. 她把房间弄脏了，还不承认。

(彼女は部屋を汚くしたのに、認めない。)

(46) a. 昨天在街上我碰到了小李。(昨日街で李さんに出会った) (= (2))

b. \*昨天在街上我把小李碰到了。

(45)の R は対象の“房间”を指す。この場合は“把”構文は成立する。一方、(46)の R “到”は動作主の“我”でもなく、対象の“小李”でもなく、Vにかかっている。このパターンの動結式は全体的に処置性が欠けているためである。この場合には(46a)は(46b)に書きかえることが許されない。また袁毓林(2013)は“看、听、想”などの感覚動詞、“碰、撞”などのような非自主動詞が“见，到”のような補語と結びつけられると動結式全体の処置性が問われると述べている。

(47) a. 他在这个城市住久了，不想再去别的地方了。

(彼はこの街に長く住んでいたもので、ほかの場所に行こうとは思わない。)

b. ?他把这个城市住久了，不想再去别的地方了。

“吃早，办迟，等久，住久，洗久，唱快，念慢”などの動結式は、R と V の間は陳述関係であり、使役義は含意されていない(袁毓林 2013:112)。そのため、この類の動結式は他動用法が弱く、その客体を支配する能力が非常に弱い。したがって、目的語の位置に客体が存在することができず、“把”構文が形成しにくいことがわかる。

## 二項 V+二項 R

袁毓林(2013:15)は「二項 V+二項 R」の動結式を大きく2つ分けて

いる。その分類は、【1】A 听懂，看懂，学会，看会，听明白，看明白，听清楚，看清楚など、B 打赢，打胜，下赢，打输，打败，など、C 看烦，吃怕，吃腻など【2】玩忘，卖赔，倒赚などの2つである。本稿は主に話題文を中心に、動作主と対象が入れ替える場合に、“把”構文の成立条件を検証する。つまり、王红旗(2001)は問題した、“输”、“赢”などのような動詞はVRのRに位置し、語義上は動作主を指す場合、乙類の“把”構文には書き換えられない理由を探る。

- (48) a. 钱他赌输了。(彼は賭け事して負けた。) (王红旗 2001:9)  
 (他赌钱+他输了(钱输了))  
 b. 他把钱赌输了。 (=4a))  
 c. \*钱把他赌输了。 (=4b))
- (49) a. 官司他们打赢了。(彼達は訴訟に勝った。)  
 (他们打官司+他们赢了(官司赢了))  
 b. 他们把官司打赢了。  
 c. \*官司把他们打赢了。
- (50) a. 这歌我唱腻了。(私はこの歌を歌って飽きてしまった。)  
 (我唱歌+我腻了(\*歌腻了))  
 b. 我把这歌唱腻了 (=3a))  
 c. 这歌把我唱腻了。 (=3b))
- (51) a. 咸萝卜我吃怕了。(大根漬けを食べすぎて嫌になった。)  
 (我吃咸萝卜+我怕了(\*咸萝卜怕了))  
 b. ?我把咸萝卜吃怕了。  
 c. 咸萝卜把我吃怕了<sup>9</sup>。

(48)–(51)の例はすべて対象を主語とする例である。(48)–(51)を語義指向の分析方法で分析すると、以下のことが明らかとなる。(48)–(49)のR“输”と“赢”は語義上それぞれ実際の動作主“他”と“他们”にかかっている。また、対象の“钱”と“官司”は“他”と“他们”に所属関係がある。この場合では、R“输”と“赢”は語義上、“钱”と“官司”にも関連していることがわかる。一方、(50)–(51)の補語“腻”と“怕”は対象の“这首歌”と“咸萝卜”ではなく、本当の動作主“我”にかか

っている。また、(50)の“歌”と“咸萝卜”は動作主の“我”とは所属関係は一切見当たらない。以上の分析からわかるように、対象は主語とし、補語は対象だけにかかっている場合は“把”構文を構成できない。

### 三項動結式

三項動結式の組み合わせは次のようなものが見られる。

表4 三項動結式のパターン

|            | 組み合わせた動結式の例           |
|------------|-----------------------|
| 二項 V+一 項 R | 砍钝, 洗湿, 擦脏, 唱哑, 写秃など  |
| 三項 V+一 項 R | 教完, 管教完, 教早, 教晚, 教坏など |
| 三項 V+二 項 R | 教会                    |

### 二項 V+一 項 R

(52) a. 这篇文章我写秃了 3 支笔。

(この文章を書くのにペン三本を使いつぶした。)

b. ?这篇文章我把 3 支笔写秃了。

(52a)は主述述語文である。袁毓林(2013:124)は主述述語文においては、主題が有標識の話題であれば、主語は無標式の話題になるはずであると述べる。つまり、(52a)の主題“这篇文章”は“这”がつく有標識の話題であるため、主語の“我”の前にはなにもつかない無標識の文になる。しかし、(52b)のように介詞“把”で受動者“3 支笔”を動結式の前に移動すると、一つの文において二つの主題が出現することになる。そこで話題の衝突(topic clash)が生じうる。但し、この場合には文全体は非適格文ではなく、容認性の低いものになることがわかる。

### 三項 V+一 項 R

(53)-(54)の補語にかかっている成分はどちらも前項述語であるが、

(55) と (56) の目的語の数が異なる。

(53) a. 你这样就教坏孩子了。

(こんなふうに教えたら子供が道を踏み外してしまうよ。)

(你教孩子+教坏了)

b. 你这样就把孩子教坏了。

(54) a. 这孩子函数你教早了。(この子供に関数を教えるのは早かった。)

(你教孩子函数+教早了)

b. \*你把函数教早了这孩子。

(53)–(54) でわかるように、目的語が一つしかない場合は、“把” 構文を構成することができる。一方、目的語が二つある場合、“把” 構文を構成しにくい。

### 三項 V+二項 R

「三項 V+三項 R」で構成される動結式は“教会((私は誰かに)教えて(誰かが)できるようになる)” だけである(袁毓林 2013:126)。

(55) a. 老师教会了学生怎样解这道题。

(先生は学生にこの問題をどのように解くのかを教えた。)

b. ?老师把学生教会了怎样解这道题。

(55a) は「VR+了」構造を用いている。このような構文においては、(55b) のように与格目的語“学生”を“把”の後に移動すると、容認性が低くなる。したがって、与格目的語が存在する「三項 V+三項 R」動結式は“把”構文と共起しにくいことがわかる(袁毓林 2013:126)。しかしながら、袁毓林(2013:126)も指摘したように道具を表す名詞句は主語として機能を果たせる場合には、動結式“把”構文と共起できる例外が見られる<sup>10</sup>。

## 5. まとめ

本稿では、用例観察と分析を通して、動結式“把”構文の成立条件を考察した。考察の結果、次の五点が明らかになった。第一に、動結詞の

前項述語は自動詞であっても“把”構文を形成することがあり得る。第二に、後項述語は単純に前項述語を説明している場合には、“把”構文を構成できない。第三に、動結式(一項)動詞コピー構文は“把”構文と共起することができる。第四に、対象は主語とし、補語は語義上それぞれ実際の動作主にかかり、対象とも関わっている場合には“把”構文を構成することができる。第五に、補語が前項述語を説明する場合、目的語の数によって、“把”構文の成立を決める。

### 参考文献

- 曹泰和 2012. 「中国語の“把”構文と日本語の結果構文における対照研究—認知言語学の視点から—」, 『駒澤大学外国語論集』, 229-252 頁。
- 范晓 2001. <動詞の配价与汉语的把字句>, 《中国語文》2001 年第 4 期, 309-319 頁。
- 影山太郎 1996. 『同意意味論』, 東京: くろしお出版。
- 刘培玉, 许海命 2010. <把字句的生成及相关问题>, 《信阳师范学院学报(哲学社会科学版)》第 30 卷第 2 期, 86-91 頁。
- 陆俭明 2005. 《现代汉语语法研究教程》, 北京: 北京大学出版社。
- 吕淑湘 1999. 《现代汉语八百词增订本》, 北京: 商务印书馆出版。
- 中村捷・金子義明・菊池朗 1989. 『生成文法の基礎』, 東京: 研究社出版。
- 施春宏 2010. <从句式群看“把”字句及相关句式的语法意义>, 《世界汉语教学》第 24 卷 2010 年第 3 期, 291-309 頁。
- 石村広 2011. 『中国語結果構文の研究—動詞連続構造の観点から—』, 東京: 白帝社。
- 王红旗 2001. <动结式述补结构在把字句和重动句中的分布>, 《语文研究》第 1 期, 6-11 頁。
- 王力 1943. 《中国现代语法》, 北京: 商务印书馆。
- 袁毓林 2013. 「试析“把”字句对述结式的选择限制」, 『中国語文法論叢』, 東京: 木村英樹教授還暦記念論叢刊行会, P107-129 頁。
- 张谊生 2005. <述结式把字句的配价研究>, 《南开语言学刊》, 129-138 頁。
- 周国光 2006. <试论语义指向分析的原则和方法>, 《语言科学》, 41-49 頁。

<注>

<sup>1</sup> 訳は筆者による。

<sup>2</sup> 動結式とは「動詞＋結果を表す形容詞または動詞」の構文である(呂淑湘 1999:16)。例えば、“吃饱”，“打碎”などが挙げられる。

<sup>3</sup> 我打算把电视给小张(私はテレビを張さんにあげるつもりです)。この例文の動作主「私」は被動作主の「テレビ」をどのように処置したいのかを表現する「処置」構文である。つまり、人をどのように扱い、どのようにさせ、どのように対処するか；物をどのように処理し、事柄をどのように進行させるかということを指す。(中略)“把”によって示されるのは一種の行為であり、一種の実行であり、一種の処置である(訳は曹泰和(2012)による)。

<sup>4</sup> 客体とは主体の認識・行為などの対象となるものである。

<sup>5</sup> 「動作主」、「対象」、「着点」、「起点」、「経験者」に関する説明は中村捷・金子義明・菊池朗(1989:65)から引用したものである。

<sup>6</sup> 外項と内項については、影山太郎(1996:22)は次のように述べている。「…主語でありながら目的語の位置に起こるものがあるから、項構造では「主語、目的語」という用語を避けて、代わりに外項(external argument)、内項(internal argument)という用語を用いる。」

<sup>7</sup> 同前。

<sup>8</sup> 本稿で言及する一項、二項、三項動詞の動詞には、形容詞も含まれる。

<sup>9</sup> (53c)の例の容認度に関しては、母語話者の15人中、2人は非文、2人は不自然、11人は自然と判断した。(53c)の例文を動詞コピー構文の“吃咸萝卜把我吃怕了”に書き換えると、15人中15人全員が自然と判断した。

<sup>10</sup> 詳細は袁毓林(2013:127)をご参照ください。